論文の和文要旨

論文題目：　バリ語とインドネシア語のコード混在

氏名：　原　真由子

本論文は、バリ社会に日常的に頻繁に観察される、バリ言語社会の理解にとって非常に重要なバリ語とインドネシア語のコード混在（BI コード混在）がいかなる現象なのか明らかにすることを主要な目的としている。従来のインドネシア社会言語学研究において体系的に取り扱われたことのないBI コード混在の一次資料を、実地調査によって組織的に収集し、それを言語学的妥当性をもつ枠組みによって記述し分析するという点で、本研究は経験主義的(empirical)な意義をもつ。それと同時に、その記述と分析を進める過程で、「コードスイッチング(codeswitching)」という概念装置の理解に関して、BI コード混在という事例の研究がもつ社会言語学における理論的な含意についても探求する。

本論文で扱う BI コード混在は、私がバリ社会において典型的であると判断する、バリ語母語話者による、バリ語がインドネシア語にくらべてより優勢なコード混在である。このようなタイプのバリ語優勢の非対称的 BI コード混在が観察される会話コーパスを対象として、そこに現れた BI コード混在を詳細に記述した。記述にあたっては、このコード混在の性質を明示し得る新しい表示法を考案し導入した。分析と考察は、統語的視点と談話分析的視点およびバリ語に特徴的な語彙構造（敬語の関与する構造）的視点からおこなった。主要な考察

に関わる重要な問題は次の３つである。

（１）統語構造においてBIコード混在は、どのような規則性を示すか。

（２）談話構造においてBIコード混在は、どのような機能を果たすか。

（３）BI コード混在は、バリ語の敬語使用とどのような相互作用を起こしているか。

これらの問題について探求した結果、BI コード混在について何が明らかになったかを、本論文の章立てに沿って以下に要約して述べる。

まず、第２章では、BIコード混在現象を考察するにあたり、BIコード混在テキストの構造的な特徴を捉えるために、「交替領域」と「非交替領域」という２つの概念を導入し、入れ子構造を括弧で示す表示法を新たに用いながら、２言語コード混在が見られる文の階層的内部構造を明らかにする枠組みを提案した。そして、現地調査で収集した会話のコード混在の度合いを２言語の要素数に基づき計り、バリ語とインドネシア語が拮抗している会話およびバリ語がインドネシア語にくらべてより優勢である会話を認定し、それらを第３章以降で分析に用いるコーパスとした。

第３章では、第２章で提案したBIコード混在の記述の枠組みを用いて、バリ語母語話者がおこなう会話に見られる文内の（つまり、センテンスの内部における）BI コード混在の一次資料を詳細に記述しながら、その事例を統語構造から見たBIコード混在の分布を観察・分析した。その結果、次のことが明らかになった。まず、文構成要素によってBIコード混在の比率が異なること、文構成要素間に見られるコード混在の出現の頻度は、主語、付加詞、述語の順に高くなるということである。次に、主語、述語、付加詞のそれぞれにおいて、それらを形成する句の内部構造を観察すると、主語・述語・付加詞に一貫して見られるBIコード混在の分布について有意な結果は示されなかった。しかし、付加詞においては主要部のみからなる副詞句および接続詞にBIコード交替が起きている事例が極めて多く観察され、他の文構成要素には見られなかった偏りとして注目した。それらの多くは談話マーカーとして機能する接続詞と文副詞であり、ここに、なぜ談話マーカーとして機能する接続詞と文副詞にBI コード交替が起きるのかという問題が浮かび上がってきた。この問題について私は、談話構造的視点を取り入れることによって、原(2000)、原(2001)、原(2002)で次のような解釈を提案している。つまり、「談話マーカーは一般的にポーズやイントネーションによって際立たせられる性質をもつことに注目し、談話マーカーにお

けるBIコード混在が接続詞と接続詞的な副詞である談話マーカーを際立たせる機能を果たす」というものである。本論文では、Azuma (1997)の主張に批判的に触れながら、この解釈を再検討し、拡大した本論文の事例においてもこの解釈が支持されることを示した。また、語内部のBIコード混在と数詞・曜日に起こるBIコード交替の事例が頻繁に観察されることから、統語構造・談話構造とは異なる形態論的・語彙的な条件がBIコード混在に働く場合があることを指摘した。

第4章では、理論的な問題に関わるトピックである、受身構文を含むBIコード混在を扱う。バリ語とインドネシア語は、形態統語構造が非常に類似し、BIコード混在文においてどちらの言語が Myers-Scotton (1993a)の言う基盤言語(Matrix Language, ML)であるかを特定することが困難であり、このコード混在を「コードスイッチング」と認めることには大きな障壁がある。この点に関して、受身構文だけは2言語間で例外的に形態統語規則が異なるという事実は、この構文のもつ社会言語学的重要性を意味する。この構文を含むBIコード混在文を考察した結果、受身構文を含むBIコード混在文に限り、そこに現れるBIコード混在がMyers-Scotton流の「コードスイッチング(codeswitching)」と捉えられる可能性が確認された。すなわち、受身構文が含まれるBIコード混在文においては、2言語の形態統語規則の違いに基づいて、どちらの言語がML（基盤言語）あるいはEL（挿入言語、Embedded Language）であるのかが同定でき、BIコード混在をバリ語からインドネシア語へのコードスイッチングあるいはインドネシア語からバリ語へのコードスイッチングと捉え直すことができた。

そして、バリ語がML（基盤言語）と解釈できる受身構文の頻度が、インドネシア語がML（基盤言語）と解釈できる受身構文の頻度に比べて、圧倒的に高いという結果が示された。もしBIコード混在における受身構文がML（基盤言語）とEL（挿入言語）を示すインディケーターとして機能しているとするならば、バリ語受身規則文（MLがバリ語）はインドネシア語受身規則文（MLがインドネシア語）にくらべて頻度が高いという非対称性は、本論文が分析対象として設定したBIコード混在の典型的テキストにおける両言語の非対称性やバリ社会における両言語の非対称性、つまりバリ語がインドネシア語よりも優勢であり、圧倒的であるという私の見解に一致している。つまり、BIコード混在においても、従来の理論的概念であるML（基盤言語）とEL（挿入言語）を認定する可能性があり、本論文の会話コーパスにおいてバリ語＝MLと解釈できる文がイン

ドネシア語＝EL と解釈できる文にくらべて圧倒的に多いという結果は、バリ語がインドネシア語に比べて優勢であるという非対称性と呼応している。

第５章では、前章までの統語構造的アプローチではなく、敬語使用の視点からBI コード混在を考察した。すなわち、バリ語は語彙選択による敬語体系をもち、インドネシア語はそれを持たないという語彙構造の違いに注目しながら、２言語のコード混在と敬語使用の相互作用を考察した。原(1999)は、バリ語の敬語法的語彙選択において平民層が敬語類、貴族層が普通語類を用いる「従来の規範」から互いに敬語類を用いる「新しい規範」に変化することが、貴族層にとって「拡張の行き過ぎ」と感じられる場合があり、敬語類のかわりに敬語的に中立なインドネシア語を用いることによって、「拡張の行き過ぎ」を「従来の規範」の方向にやや引き戻す機能を果たしている、という解釈を提案した。この原(1999)の解釈における「新しい規範」は、平民層と貴族層が互いに敬語類を用いる「尊敬方向への拡張」であったが、本論文では、さらにもう一方の規範の拡張、つまり平民層と貴族層が互いに普通語類を用いる「親密方向への拡張」にも考察を広げた。その結果、平民層が敬語類、貴族層が普通語類を用いる「従来の規範」から互いに敬語類を用いる「尊敬方向の拡張」あるいは互いに普通語類を用いる「親密方向への拡張」への変化を、尊敬方向・親密方向のどちらの方向であれ、同様の原理で解釈できることを示した。すなわち、従来の規範とは異なる敬語語彙クラスを用いる話者の側が行き過ぎと感じ、バリ敬語的に中立なインドネシア語を用いることによって、拡張の行き過ぎを従来の規範にやや引き戻す機能を果たしているという解釈を提案した。つまり、原(1999)の解釈は支持され、さらに解釈が適用されうる範囲を発展させることができた。

最後に、第６章では、本論文の議論を総括した上で、今後おこなうべき研究課題について述べる。主な課題は、本論文で扱わなかった、インドネシア語がバリ語にくらべて優勢である、いわばバリ社会において“非典型的”と私がみなす BI コード混在現象の資料収集とその考察である。ここでは、“非典型的”と私がみなす非対称的BI コード混在の資料を質的に観察する予備調査の結果についても触れ、BI コード混在の新しい語用(pragmatics)の発生を示唆するという意味で、注目すべき現象を指摘する。